CURES 地域経済ニューズレター
NEWSLETTER
1990.4.15 No.15

巻頭言

地域経済学の潮流

前田 敬四郎

地域経済学は、今日、都市経済問題、輸送問題、自然資源問題などの多方面の研究に関連し、実り多い貢献をしている。経済学と地理学の十字路に出現して来る諸問題に対して統一されたアプロチで対処しているのは、そのよい例である。然し、地域経済学と云えば、空間に於ける立地理論から始まったものである。

立地理論は、経済学の一般的発展に貢献はしたが、空間が時間と違って経済学の本体のなかにうまく統合されなかったので、傍流として残ったと云った方がよいのかも知れない。

立地理論の本質的要素は、「輸送費」と「生産・消費の収益逓増」の二つである。外部性を持たない空間同時体系のなかで、これらの要素を考えれば、収益規模一定で、輸送費が存在しない時は、経済活動の規模や立地は決定しない。収益規模が変化し、輸送費が存在しない時には、経済活動は局所的収益一定で作用し、空間における生産要因や商品の動きはない。輸送費と収益逓増又は可変の時、経験的に興味ある立地均衡の可能性が存在する。立地理論の核となる部分は、輸送費の増加と生産費の減少の間にあるトレード・オフの事実である。

最初に、立地理論を展開したのは、リカードオ（1821）とチユネン（1826）の二人であ

■ 巻頭言……前田 敬四郎
■ CURES Report
「社会運動史における『数の問題』」……林 宥一
■ CURES Salon
「『金問題と貨幣・信用論』（経済学部研究叢書3）を刊行して」……松本 久雄
■ Topic
「くに」について……中沢 真理
■ Information Processing
「統計の科学性」……海野 八尋
■ 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

る。リカードオは、輸送費を捨象し、土地の相対的豊饒性を基礎に差額地代説を展開し、比較生産費による農業立地理論を生み出した。

土地に関する「リカードオ差異」は、他の経済活動にも拡張され、今日のアロー・デュブロ・モデルのなかにも捜入することが出来る。然し、アロー・デュブロ・モデルは、地域経済学の関心の枠外にある。

現代の立地理論の基礎を形成したのは、チユネンである。同一の中央市場で農作物を売る農夫は、その市場から異なる距離にある土地の地代が、総収入から要因費用と輸送費を差引いたものに等しくなるように競り合う。土地は最も高い値をつけた使用者に渡り、この値が地代となる。立地の均衡は、中央市場から同心円となる。この単純モデルは、都市の土地利用を取り扱うのに適するように、Alonsol(1964)によって改良された。すなわち、中央市場の代りに商業の中心地域、農作物の代りにビジネスを持って、都市の商業地利用が、チユネンの場合と同様に決定される。

立地理論のもう1つの糸は、ウエーバ(1909)の工場立地理論である。彼は、生産費と（投入物と産出物の）輸送費の和を最小にするように、工場の立地問題を解決した。地域政策上の最適立地点を選定するための実用的手段として開発された生産費比較分析は、ウエーバの理論から得られたものである。

上述の立地理論から少しそれるが、North（1955）によって始められた輸出ベース・アプロチと云われるものがある。産出物を地域外に輸(移)出する基礎産業の存在から得られる誘発効果に着目した地域分析である。基礎産業の労働者や企業の需要が、附加的雇用を生み出し、局所的雇用乗数に導くことを説く。

輸出ベース・アプロチは、地域外えの輸出増加の地域効果を数量化し、レオンテイエフの産業連関分析を地域え適用したIsard (1975)の投入一産出分析によって最高潮に達する。

ごく最近であるが、アメニティ(Amenities)を、財、労働などの需用、供給関数のなかに入れたり、外生的要因として用いる都市モデルが開発されたことを付け加える。

扨、立地理論を終えて、地域経済学を独立した分野にしている特性について考えよう。そのために、1つの地域と1つの国の間の相似性や相異を比較する。財がある国とそれ以外の国とで取引されることは、地域と国では似ている。供給要因の立地の相違が地域間の取引に導き、生産要因の1つである資本は、国と地域の間を動くことが可能である。

地域と国の最も重要な相違は労働である。労働者が国家間を自由に動くことは制約を受けるが、1国内の諸地域間では制約なしに自由に動き得る。政策手段については、相違の限界を超えている。1国と異って1地域は、貨幣、貿易政策を行うことは出来ない。この相異が、国際貿易論と地域経済学を別々のものにしている。地域経済学は立地から生ずる効果に大きな関心があり、地方税並びにその支出政策の効果、地域間の活動に影響を与える努力に主要な政策の関心がある。

地域経済学は、経済学の本流からそれているが、取引と取引されない財を明確にした点で、経済学の他の分野をリードした。地域外から供給される財の価格は、その経済の価格に輸送費を加えたものとなり、地域外に輸（移）出される財の価格は、価格から地域外の目的地への輸送費を差引いたものである。価格は、輸（移）出価格によって下に有界、輸（移）入価格によって上に有界となる。生産者は輸（移）出価格以下に売るよりも地域外に財を供給し、需要者は、輸（移）入価格より多く支払うよりも輸（移）入する。斯くして、財は、価格が二つの有界のどちらかにある取引財と二つの有界の間にある非取引の範ちゅうに分けられた。

今後の地域経済学の発展を願って「巻頭言」を終える。

（金沢大学経済学部学部長）